

港 船

神戸港・中突堤のホテルに浮かび上がるクルーズ船

文・写真 上川庄二郎



【足お先に、神戸港開港四〇年を祝つて】

二〇〇六年未、クリスマスシーズンを迎えて、神戸メリケンパークオリエンタルホテル恒例のホテル壁面を飾る巨大イルミネーションの点灯が行なわれた。

この電飾は、一九九七年から続けられているから、昨年が満十年。その節目の年が、神戸港開港四〇年と重なったこと、それに客船バースの中突堤シフトも加わって写真のようなみなと神戸を象徴するクルーズ船をイメージしたイルミネーションがデザインされた。開港したのは、一八六八年一月一日だから「足お先」というところ。

点灯式には、元客船の船長やこの日にこのホテルで挙式したカップルも加わり「ポン・ボヤージュ！」の発声で一斉にボタンが押されると、鮮やかな色合いの船の絵が浮かび上がった。クルーズ船・ルミナス神戸2からも祝福の汽笛。続いて神戸市消防音楽隊の演奏で、晴れやかな式典に色を添えた。

【世界でもユニークな海に浮かぶホテル】

このホテルは、神戸市の港活性化のコンペに応じて提案されたプロジェクトで、21世紀に開かれた都心のウォーターフロントの創造、文化拠点の創造、新たな港湾ターミナルの創造を目指した海上ホテルとして

九九五年にオープンした都心の海上リゾートホテル。

客船バースの中突堤シフトによって、

このホテルは、いよいよその真価を發揮するところとなつた。

外観は、海洋博物館やポートタワーとデザイン上から



ルミナス神戸2の船体は、みなとの雰囲気を盛り上げた

ORIENTAL HOTEL



2006.11.22
illumination
ライティングセレモニー

【都心ターミナルとも、もつと便利に！】

昨秋三宮にグランド・オープンしたミント神戸、そのターミナルのオープンにあわせ、ホテルとターミナルをもっと便利にと、従来のシャトルバスをホテルオーララ神戸と共に運行し始めた。

新聞は、これを呉越同舟現代版などと揶揄しているが、これは当たらない。今や、メリケンパーク、中突堤界隈は、神戸の新たな観光スポットとして人気が高まりつつあることを示していると見るべきだろう。その何よりの証拠が、ホテル稼働率の大幅なアップという客観的な数字である。

何はさておき、神戸の活性化はみなとを除いては考えられない。まずは、このイルミネーション効果に大いに期待したいところである。

もう一つの特徴は、照明のカラーコンディショニング。これは、著名な石井幹子照明デザイナーによるエメラルド・ブルーの光のポイントがポートタワーの赤、海洋博物館の白とよくマッチして、海辺の素晴らしい光の空間の雰囲気を醸し出している。まさに海辺の街である。

こういったところが若者にも好感され、デート・スポットであるばかりでなく、ウエディング・ナンバーワンというのもうなずける。



■ かみかわ しょうじろう
1935年生まれ。
神戸大学卒。神戸市に入り、消防局長を最後に定年退職。その後関西学院大学、大阪産業大学非常勤講師を経て現在フリーライター。

神
an essay

戸 生 田 の 杜 の 碑

皇后陛下の御歌碑と 生田の杜の碑

加藤 隆久

(生田神社宮司
神戸芸術文化会議長)

神戸市役所南隣に拡がる東遊園地に、昨年秋、
皇后陛下の御歌を記した御歌碑が完成し、九月二
五日大安の日に、井戸敏三兵庫県知事、矢田立郎
神戸市長など約50人が参列して除幕式がおこなわ
れました。

笑み交はしやがて涙のわきいづる

復興なりし街を行きつ

平成十八年の正月、宮中歌会始での皇后陛下の
御歌で、平成十七年一月に「阪神・淡路大震災十周
年のつどい」へ臨席のため、天皇陛下とともに神戸
市に行幸啓された際に詠みなさったものです。

この御歌は、皇后陛下が神戸の街で出会う人々と
笑みを交わし、復興の喜びを分かち合われながらも、
それぞれの人が越えてきた苦難を思い涙ぐまれた御
記憶を詠まれたものであります。

御歌碑は、私が「皇后陛下御歌碑建立委員会」
の会長を仰せ付かり、井戸知事、矢田市長、稻垣

神戸新聞社社長、新野神戸都市問題研究所理事長
など有志で組織され、「皇后陛下の御心を永く後世
に伝えるとともに、改めて災害に強い街づくりに取
り組む誓いにしよう」との呼びかけが結実。能勢産
の黒御影石製の縦1メートル、横2・4メートルで、

日本芸術院賞などを受賞し日本のかな書道界の第一
人者である井茂圭洞氏（神戸生まれ）が揮毫され、
遊園地内の震災犠牲者の氏名を刻んだ「慰靈と復
興のモニュメント」の北側に建てられました。



皇后陛下の御歌を刻む御歌碑（東遊園地）

歴史究めて百年の歩みを語る杜の老樹に　白鳳」（庵治石製）です。

昭和四十八年（1973）九月に、神戸生まれの世界的箏曲家で、生田神社の結婚式「むすびの神曲」の「あなたにやしきをとめを　あなたにやしきをとこを」を作曲した宮城道雄の音楽碑（青銅製）が、生田神社会館前の桜とつづじの植え込みの中に建立されています。

また、笛波会会長桑田笛舟氏の揮毫による上田秋成の生田の桜を詠んだ黒御影石の書碑「沙馴れし生田の森の桜花春の千鳥の鳴きて通へる」が、生田神社斎館横に建っています。

さらに、神戸のかな書道家、深山龍洞氏の筆による順徳院の「秋風にまたこそ訪はめ津の国の生田の森の春の曙」の書碑が茶室神泉亭脇に建立されています。

お正月にふさわしい句碑は、五十嵐播水の「初曆めくれば月日流れそむ」です（写真右上）。平成六年四月、俳句誌「九年母」の第八百号刊行記念として九年母会により、生田神社拝殿前の段葛に石踏と万両の根方に建立されています。

生田池畔には阪神大震災復興記念碑としてチタン製の、拙詠「うるはしき唐破風もちし拝殿は地上に這ひて獸のごとし」「朱に光る唐破風今ぞ聳えたちて青葉なす生田の森に雨晴れわたる　白魚」（瀬田真黒石製）があります。平成十七年、神戸史談会は創立百周年を迎えました。これを記念して、生田の森に聳える楠の大木の傍らに神戸史談会会长の不肖私の歌碑を建立してくれました。「ふるさとの



五十嵐播水の句碑（生田神社）

の御歌碑の建立は、復興に思いを寄せられた御心を後世に伝えるとともに、この御歌は、被災地の市民を勇気づけてくれると思われます。今年も間もなく十一回目の震災の日がやってまいります。

さて、生田神社の境内には、戦災復興から阪神大震災復興に至るまでに八つの碑が建立されています。昭和三十五年（1960）八月に生田神社神徳館横に、ふあうすと川柳社によつて建てられた相元紋太氏の「よく稼ぐ夫婦にもあるひと休み」という御影石製の川柳句碑。この碑は阪神大震災で真つ二つに割れて破損しました。しかし平成十年（1998）、元通りに再建されました。

また、生田の森に生田神社の先々代の宮司（小生の父）加藤鏡次郎の自詠の歌碑「ほのかなる土の香たて青葉なす生田の森に雨晴れわたる　白魚」（瀬田真黒石製）があります。平成十七年、神戸史談会は創立百周年を迎えた。これを記念して、生田の森に聳える楠の大木の傍らに神戸史談会会长の不肖私の歌碑を建立してくれました。「ふるさとの



■ 加藤隆久（かとうりゆうき）

1934年生まれ。

生田神社宮司。神戸芸術文化会議長。神戸女子大学名誉教授。文学博士。震災で倒壊した生田神社を「耐震神社」として再建。被災史や地域史の研究、伝統芸能やミージカルのプロデュースなど幅広く活躍。神戸市文化賞・兵庫県文化賞受賞。

森に還る

大谷 成章（フリーライター）

剪画／とみさわかよの

昨年暮れ、俳優で、日本野鳥の会会長、コウノトリファンクラブ会長でもある柳生博さんの「花鳥風月の里山」と題した講演の記録を神戸新聞に頼まれた。紙面のスペースが限られていたので、カットせざるを得なかつた話の一部をここに復活させてもらうと…

ぼくは山梨県の八ヶ岳の中腹で三十年間、森を作っています。密生して下草が生えていないカラマツの人工林を元の自然の植生に返そうと始めたところ、「元の豊かな自然はどんなのだろう」とやってくる人が増え、散策路やギヤラリーのあるパブリックスペース「八ヶ岳俱楽部」を作りました。いまは年間十万人がきます。

「八ヶ岳俱楽部」には、阪神・淡路大震災以後、駐車場にはたくさんの数の神戸ナンバーの車が並びます。スタッフが「大変だったですね」と声をかけると、「深呼吸したくて来ました」と言つていました。ほこりだらけのまちから深呼吸しに来てもらつて、スタッフは神戸の人たちと抱きあつて泣いていました。八ヶ岳の花鳥

風月を語りあい、みなさんに笑顔が戻つてくる姿に、自然がどれほど痛み、悲しみをいやしてくれるかを実感しました。

柳生さんの話を聞くのは2度目で、一昨年に「八ヶ岳俱楽部」を訪ねたときも、なるほど駐車場の車の5分の1ほどは神戸ナンバーだった。奥様の手づくりのフルーツティーをいただきながら、「八ヶ岳で暮らすようになったのは、ぼくの原風景を求めて移り住んだからなのです」という話を聞いた。テレビの仕事が殺到し、ムリをすると家族や友人関係がボロボロになり、それをいやすのは少年時代に感動した八ヶ岳の自然の中に身を置くしかない、と思つたからだと言つていた。

災害に巻き込まれて、自分の身を一時よそに移すことなどで気力を取り戻し、新しく創作活動を始めた人は、たとえば谷崎潤一郎。関東大震災の後、阪神間に移つて、六甲の山並みや住吉川の流れを身近に感じながら『細雪』を書いた。永井荷風は、アジア・太平洋戦争の空襲を逃れて明石に移り、

青い海、白い砂浜、輝く日の光の中に身を置いて、生き続ける力を得た、と記している。

神戸つ子が「八ヶ岳俱楽部」を訪れて、白樺と落葉松の林の中で心に積もったほこりを払い、「さあ、がんばるぞ」と立ち直った姿は想像できる。

被災の現場で、たくさんの人たちからさまざまなお要求を突きつけられ、どう応えていいのかわからぬ。「なにができるのだろうか」と迷う。そんなとき、一時、現場を離れて、全体を見渡してみると。「八ヶ岳俱楽部」を訪ねた人たちの中には、そうした人も多かつただろう。

森や林がどれほど私たちを支えてくれるかを、柳生さんは語り続けてている。

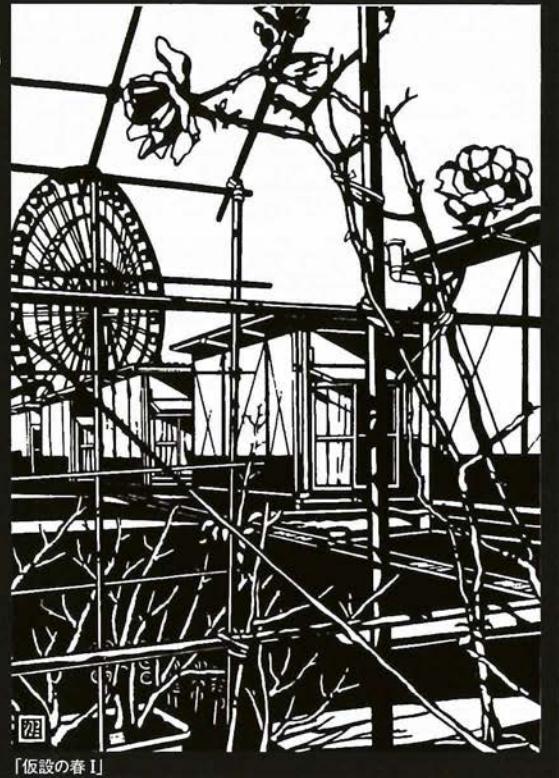
森には木靈がいる。木の精だ。根と幹と枝を駆けめぐつて土と天空とをつないでいる。葉を茂らせ、実を結ばせる。葉は土に還り、実は鳥を育てる。自然の永遠の命の使者だ。森に入れば、人は命の永遠を実感することができる。

被災地には震災モニュメントがたくさんある。残骸になつた建造物。祈りをこめた仏像や鎮魂碑。鷹取の大國公園の半面が焼け焦げた火止めのクスノキも、木の強さとやさしさを語つていて。

震災モニュメントはいまもそれぞれのまちで作られている。中央区の神戸港貨物駅跡地でも震災復興記念の「みなとのもり公園」が計画されている。甲子園球場の3倍ほどの広さで、100年後には、六甲の山並みから海岸へ続く

森林帯の一部になり、命の循環、魂の永遠を具現した森になることが夢だ。

いま、たくさんの市民がどんどんぐりから苗木を育てている。この春、持ち寄つて植樹が始まる。できれば震災の犠牲者の数、6434本の木を植え、木靈が住む森にしたい。



■ 大谷 成章（おおたに・しげあき）1939年但馬生まれ。元神戸新聞記者。震災当時は月刊神戸「子編集者」その後フリーライター。「阪神・淡路大震災10年」（共著『岩波新書』など）。

出石町奥小野

出石アカル

絵・菅原洸人

題字・六車明峰

念。だけどたずねられたら、面倒なのでこの来歴を答えることにしてる。本当のところは、この連載の第23回「名前」を参照ください。

話が逸れた。家内の実家は、その出石神社からまだ奥の、山奥の、奥小野という在所である。「まんが日本昔話」に出てくるような里である。春になると、山の坂道でツチノコがコロコロと遊んでいる! 山に囲まれた集落の真ん中を清流が流れおり、耳を澄ますと50mほど離れた高みにある実家の縁側からせせらぎが聞こえる。傍後に鎮守があり、境内に杉の木が高く聳えている。そのてっぺんで、カラスが鳴く。

「カー、カー、カー」と鳴ぐ。

と書いてしまえば当たり前だが、ここのかラスは、驚くなれ方言で鳴くのだ。嘘ではない。低音から中音、高音と一鳴きごとに音程が上がつてゆく。それが実にのんびりと聞こえる。「カー、カー、カー」ああ、音譜で表したいものだ。但馬弁特有の抑揚である。

そのカラスが、畑で悪さをするのだと、家内のお母さんがわたしに嘆いたことがあった。せつかく植えた豆を、掘り返して食べてしまうのだと。そこでわたしは訊いた。

「なんでカラスは、せつかく植えた豆を食べるんですか?」と。するとお義母さんは、「カラスはひまんだしきやーでひよーきやーな」と答えたものだ。

「なんや、ママやったんかいな。俺はまた、新しいパートのおばちゃんかと思ったがな」常連さんの一人が、家内を指しての言葉である。実は、家内が30年ぶりにヘアースタイルを変えたのだ。長い髪をバサリと切つてしまつて、うつかりするとわたしも見間違える。

その家の故郷は、兵庫県北部に位置する出石町。この度の市町村合併で豊岡市になってしまったが、小じんまりとしたい城下町である。わたしの大好きな町だ。町のはずれに但馬の一の宮、出石神社があつて、祭神、天日槍（アメノヒボコ）の最初の妻の名を阿加流比売（アカルヒメ）と言う。彼女は太陽の光から生まれたと『古事記』にある。すこぶる美人であつたと。わたしのベンネーム「出石アカル」はこれに由来、はしない。残

わたしは一瞬、「ポカン！」である。

実はその時、わたしはその話の前にも、お義母さんとの話の中で、疑問に思うことを根掘り葉掘り聞いていたのだつた。どうやら、いい加減うつとうしく思われていたようである。そこへ「なんでカラスは…？」である。バカにしてると思われたのかもしれない。しかしわたしは至つて真面目だつたのだ。あの山里で、人がせつかく植えた豆をわざわざ食べなくても、そこいら中にいくらでもカラスの食べ物ぐら

いはあるだろうにと思つてのことだつた。

「カラスはひまんだしきやーでひよーきやーな」

わたしの大好きな但馬弁である。「カラスは暇やからに決まってまんがな」とでも訳そつか。



話をまた軌道修正する。
わたしの店「輪」は、昭和 62 年の暮れにオープ

ンした。丸 19 年になる。

それまでは米屋を営んでいた。ところが時代の流れで、喫茶店に転業。そのオープン当初のことである。お義母さんが様子を見に来ておられて、家内のあまりの忙しさ、苦労の様子に、思わず漏らされた言葉が、

「しのびん、しのびん」であった。「忍びない、忍びない」の意である。「しの」を沈み込むように発声し、「びん」で語尾を軽く上げる。それが

わたしには何とも切なく聞こえたのだ。

お義母さんにすれば、こんな筈ではなかつたのであろう。娘は、米屋に嫁がせたのである。一生、食いつばぐれはないと思われたに違いない。米屋の奥様として何不自由なく暮らして行けると思われたのだ。ことの詳細は措くとして、時代が変わったのである。

米屋の奥様の筈が、喫茶店のママとして、忙しく立ち働いている。しかもオープン当初である。

特別の忙しさである。「あ

あ、娘がこんなに苦労している」と思われたのであろう。実際に悲しげで、切なげな「しのびん、しのびん」の言葉がわたしの胸に忍び込んだ。

そのお義母さんも地震があつた年の夏に亡くなられた。その後お義父さんも亡くなられ、家の実家は、後を繼ぐ者がいなくなり、このほど人手に渡つてしまつた。この村も過疎がすんでゆく。先日、お墓参りに行き、側を通つたが無性に淋しかつた。

月日は流れたのだ。鎮守のカラスも、もう但馬弁で鳴いてはいない。ツチノコ？の姿ももう見ない。

■出石アカル（いづし・あかる）
日「同人、兵庫県現代詩協会会員。詩集『コーヒーカップの耳』（編集工房ノア刊）にて、二〇〇二年度第三十二回フルーメール賞文学部門受賞。

『神戸異人館物語』

夜明けのハシラー



ハンター肖像

三条杜夫
絵・谷口和市

運命の出会い

兵庫に続いて大坂にも外国人居留地が予定されていた。慶應三年に幕府と各国との取決めにより準備が進められたものの、かんじんの幕府が崩壊してしまったことによって、計画が宙に浮いてしまった。明治新政府がこれを引き継ぎ、外交等の問題を処理する機関として、安治川沿いに慶應四年四月、富島外務局を、その翌月には川口運上所を設置した。運上所では外交、関税事務等の処理が行われ、後に税関と変わる。運上とは江戸時代に商、工、狩獵、運送などに従事する者に課せら

れた税の一種である。

川口運上所を設けた川口町一帯の二万六千平方メートルを川口居留地として造成を予定し、兵庫の居留地第一回競売の五日後の明治元年七月二十九日、大阪でも第一回競売が行われた。キルビーはこの競売にも参加し、第十七番区画三百五十五坪を七百十両余りで落札した。これにより兵庫に二箇所、大阪に一箇所、計三軒の商館を構える予定となつたが、その計画に向けてキルビーとハンターは機械や雑貨類の輸入を始める準備にかかり

ていた。

「医薬品ノ輸入モシタインデスガ・・・?」

ハンターがキルビーに提案した。アイルランドで、ハンターは医薬品の勉強をした経験がある。「コノ国ハメイスンノジャニルガ遅レテイマス。コレカラハオソラク、メディスンガ必要トナルト私ハ思イマス」

アイルランドで薬剤師並みの知識を身に付けた自信に基づく意見である。青雲の志を抱いて世界を航海するには、人間の体を病気から守ることが不可欠とハンターは考え、故郷を出るまで、真剣に薬学の勉強をしたのであつた。

「私ハコノ国ガ好キデスガ、悪イ病氣ガ流行ルコトハ好キニナレマセン」

ハンターが横浜にやつて来た慶應元年の三年前の文久二年には江戸でコレラが大流行し、囲碁の道で十二年間にわたり、無敗の地位を守り抜いて来た本因坊が三十四歳で死んだという話しあがめられた。横浜で耳にしていた。囲碁は英國で言うチエスのようなものとハンターは理解し、日本で基督教とあがめられる本因坊がもろくも、流行り病に命を落としてしまつたことに心を痛めた。

「囲碁ノ勝負ニ負ケタコトノナイ人ガ流行リ病イニハ勝テナイ。コノ国ハ野蛮デス」

これからいよいよ貿易の事業を始めるにあたり、医薬品の輸入もぜひ、行いたいとハンターは考へるのであつた。キルビーは年下のハンターを部下と見るのでなく、腹心の相棒と思い、ハンターの意見を尊重することにして、今回の提案を素直に受け入れた。屠牛業は新天地での事業

の手始めとしては一応の成功であつた。が、今後の事業展開としては、商社として各種商品の輸出入が当然考えられねばならない課題であつた。

大阪川口居留地への進出を見込んで、特にハンターは医薬品の取り扱いをアイテムに加える必要があると踏んでいた。それというのも、大阪には道修町という薬問屋が集まる地域があることを聞き及び、兵庫とは異なるビジネスの展開をすべきと彼なりのプランを描いていたのである。

ハンターの認識は正しかつた。安土桃山時代に豊臣秀吉が大坂城を構えるにあたり、道修町を中心して薬業を盛り立てるよう促したことがあつて、江戸時代に入つてからも、薬の町の形態がいつそう整い、明治維新的今、道修町はますますその存在が日本全国にクローズアップされつつあるのであつた。

ハンターの計画に役にたつよう走人塾の米田左門講師が文献を調べて報告してくれた。

「昔、中国からの帰化人の北山道修が大坂で医業を開いたところ、その腕が素晴らしいというので、次第に薬種業を志す者たちが集まつて薬の町を築いて來たんですね。文政五年に大坂でコレラが行つた時には、虎の頭の骨を碎いて作った虎頭殺鬼雄黄冑（ごゆうこうゆう）という薬が道修町で作られ、薬の町としての評価が高まりました」

「虎ノ頭ノ骨ガコレラニ効クノデスカ?」

ハンターが驚いて聞き返す。

「西洋医学デハ考エラレナイコトデス」

「ハンターさん、だからこそあなたの活躍の場があると私は思うのです。先進国の医薬品をどんどん

ん日本に輸入して下さい。私はあなたに期待しています

【います】

左門講師の激励を受けて、ハンターは勇氣百倍ヨーロッパからの医薬品の輸入を開始した。このことが思いがけない面で役に立ち、ハンター自身の運命まで左右することにならうとは、想像だに出来ないことだった。

堂島川と堀川が合流したかと思うと、すぐに安治川と木津川に分かれる。二つの川の間に横たわる三角地が川口居留地として予定されていた。木津川の東に位置する江戸子島上町に薬種問屋「平野常助商店」があつた。大阪進出をもくろんでキルビー商会は医薬品の輸入卸を開始したが、新規事業の取引先を開拓中で、ハンターがしばしば大阪を訪れては販路開拓に余念がなかつた。平野常助商店も、取引を始めて間もない得意先の一軒だけつた。

日本には秋霖^(しやうりん)という言葉がある。しとしと秋の雨が降り続くさまを表現した言葉だが、九月八日に明治元年となつた翌月、まさにその言葉通りの秋雨が降る日が続いていた。天気の悪いことにもめげず、ハンターはその日も大阪入りしていた。平野商店から輸入薬品の注文を受けていたこともあり、雨だから得意先回りをやめるというわけにはいかなかつた。

【足もとの悪いなか、すまんこつてすな】

番頭が泥にまみれたハンターの靴を見てねぎらいの言葉を送つた。この店は主人の平野常助が感じのよい人柄であるので、従業員の躊躇までいき届

いている。

【大丈夫デス。レイニーデイニハソレナリノ日本ノイメージガアルノデ私、レイニーデイ、問題ナシデス】

土間で合羽を脱いで、帳場の上がり口に鞄を置かせてもらったハンターに番頭が言う。

【いとほんもおんなじことを言わはります。雨に打たせてほしいちゅううて】

番頭の何げない一言だが、その一言が人の運命を左右する重大な糸口となつたのである。

【イトハン、オ娘サンノ愛子サンデスネ、彼女、雨ニ打タセテホシイ、言ウノデスカ？ ドウシテデスカ？】

鞄の中から注文の薬品を取り出しながら、ハンターは尋ねる。

【この間から高熱を出してはりますねん。もともと腸わざらいやそうですが、医者がもうどないも手の打ちようがないさかい、好きにさせてやりなさいゆうことですねん。座敷で寝てもろうてましたんやけどえらい熱でして、いとほんが雨に打たせてほしい言わはりまして、縁側にふとんを移したとこですわ】

ハンターがこの店を訪れるのは、三、四度目にならうか。帳場を助けたり、商品の管理を手伝つたり、かいがいしく働く娘がいた。主人常助の長女で十八歳の愛子ということだった。珍しい外国人の訪問にいつも笑顔で挨拶してくれる感じのよい女性だった。その娘が病気になつて医者から放されているという。ハンターは狐につままれたような気持ちだった。

「ドゥシタンデスカ？ コノ間オジャマシタ時ハ

元気ダッタデハナイデスカ？」

「あてらも不思議に思うてんですけど、急に病気にならはつたんです。あれよあれよゆううちに悪ならはつて、明日をも知れぬ命にならはりましてん」

明日をも知れぬ命という割りにこの店には緊張感がないことをハンターは感じた。逆に言えば、

それほどまでに愛子の病状がもうどうしようもないほど悪化してしまっているということか。

「会ワセテ下サイ。愛子サンニ」

ハンターは何故かいたたまれぬ気持ちになつて頼み込んだ。番頭が案内した奥座敷の縁側で、降り込む霧雨に打たれながら目を閉じたままの愛子の姿があつた。一目見るなりハンターは叫んだ。

「オウ、ノウ！ ミス愛子、雨、ダメデス！」

ハンターは愛子のそばに駆け寄ると、寝床ごと

彼女を抱え込んで、座敷に運び込んだ。

うつすらと目を開けた愛子が虫の息で反応した。

「あ、ハンターさん……」

あとが続かなかつた。高熱におかされた愛子の熱気がハンターの顔にまで伝わつてくる。

「ダイジヨーブ、ナントカシマス」

ハンターはふとんごと愛子を座敷に下ろすと、鞄の中から幾つかの薬を取りだして、その一包みを愛子の口にふくませた。

「スマセン、オ水クダサイ」

丁稚が水を持つてくるまでの間、ハンターはひとつと愛子の顔を見つめていた。そして手をそつと愛子の額に置いて目を閉じたままの愛子に小声でささやいていた。

「ダイジヨーブ……。ヨクナリマスヨ……」

丁稚が運んできた土瓶

の口を愛子の口にくつけて、ゆっくりと時間をかけながら水を少しづつ愛子に飲ませるのだった。

「熱キット下ガリマス。元氣ニナリマスヨ、ミス愛子……」

水をふくませ終わると、ハンターは手ぬぐいを借りて水にしめらせ、そつと愛子の額の上に置く。

「薬売る身が娘の命も救えぬのかと消沈しどりました」

常助がハンターの顔を見るなり、つぶやいた。
いつもの元気いっぱいの主人の姿はどこに消えたのか、やつれはてた中年男がそこにいた。愛娘を死なせてしまうかも知れない悲しみにうちひしがれている主人にハンターは言う。

「アキラメテハイケマセン。熱ハ原因ガアルカラ出ルノデス。原因ヲ取り去ル方法考エマショウウ。私、薬作ッテ持ツテキマス」

「医者がもう駄目だから好きにさせてやりなさいと言ふとるんですが・・・」

「失礼デスガ、日本ノドクター、出来ナイコト、ヨーロッパノ薬、病氣ナオセル可能性アリマス」「ハンターさん、本當ですか? うちが今扱つてゐる支那やオランダからの薬ではどうしようもないと医者が言うりますが」

「失礼デスガ、ソレ以上ニ優秀ナ薬ヲ私ガ調合シマス」

「ハンターさん、信じていいのですか?」

常助の顔にやつと持ち前の品の良さが戻つてきた。

「ハイ。私ヲ信ジテ下サルナラ、雨ニ打タセルノハ良クアリマセン。平野商店ハ薬売ル店デス。デミス愛子治シマシヨ。私ヘルプ約束シマス」「ハンターさん、あなたの力で治せるものならゼシテアゲマス」

やさしく言うとハンターは静かに座敷を離れ、

主人の常助に面会を請うた。

「あ、り、が、と」

うつすらと目を開けた愛子がそれだけ言つた。

「ドンナニ熱高クテモ、雨ニ当タルノハヨクアリマセん。熱ハ私ガ下ゲテアゲマス。病氣モ私ガ直シテアゲマス」

やさしく言うとハンターは静かに座敷を離れ、主人の常助に面会を請うた。

「に頼み込んだ。」



「日本ノドクターノ治セナイ病氣、私ノ藥デキッ
ト治シテミセマス」

きつぱりとハンターは言い切る。

「最後ノ望ミダカラトイツテ雨ニ打タセルノダケ
ハ良クアリマセん。モット熱高クナッテ愛子サン
死ンデシマイマス。雨ヨリモ、店ノミナサンノ氣
持チデ彼女ヲ包ンデアゲテ下サイ。オ願イシマス」
「解りました。ハンターさん、あなたのおつしや
る通りにします。奇跡を待ちます」

「奇跡ハ待ツテイテハ起コリマセん。待ツモノデ
ハナク、作ルモノデス」

番頭と丁稚がそばにやつて来て、主人と共に頭
を脳にこすりつけてハンターに言うのだった。

「ハンターさん、お願ひします！」

兵庫の紺部村の留吉の家にハンターが帰り着い
た時には、暮れやすい秋の日がとつぶりと夜にな
っていた。夕食を取ろうともせず、自室にこもる
なり、ハンターは菜種油のランプの灯りで、薬の
調合を始めた。キルビーが心配してのぞき込む。

「ドウシタ？ 何カアッタノカ？」

事情を説明するのもどかしげに、色々な薬の
調合を試みるハンターに、キルビーは

「ベストヲ尽クシテ平野商店ノ娘サンヲ救ツテア
ゲマシヨウ。ココニアル藥足リナケレバ、英國人
ノ誰カ藥持ツテイナイカ、探シテミマス」

と、ハンターを激励する。愛子は細菌性の病氣
におかされているとハンターは診ていた。細菌を
殺す新薬が有効だろうと考えた。ちょうどふさわ
しい薬が数種類、英國から届いていた。これまで

の日本に流行った病氣は殆どが細菌性のものだと
ハンターはアイルランドのロンドンデリーで勉強
した知識を活かして分析していた。だから、何よ
りも細菌をやつづける薬が日本には必要だと考
え、今にいう抗生物質系の医薬品を中心日本か
ら取り寄せていたのである。

自室に入つたり出てこないハンターを心配し
て、タネがおにぎりと味噌汁を運んできた。
「ハンターさん、これだと食べられるでしょう？
人様を助けるには、自分自身が体力を付けないと
ね」

さりげなく気遣う日本の母がそこにいた。久し
く忘れていたロンドンデリーの母を思い出してハ
ンターは胸が熱くなった。国を出て十年余り、無
我夢中で新しいことへの挑戦の連続で人間らしい
気持ちを忘れてしまっていたが、思いがけなくも
人並みの気持ちを取り戻して、ハンターは何とし
てでも平野常助商店の娘・愛子の命を助けようと
自分自身をふるい立たせるのだった。

つづく

注：大坂は、明治元年五月二日大阪府誕生を機に、
それまでの大坂を大阪と改めました。当小説では歴史的事実に沿って
大坂と大阪を使い分け表記しています。



三条社夫（さんじょう・もりお）
フリーアナウンサー・放送作家。ルボラ
イターを経て、放送業界へ。経験にもと
づく地域活性化講師としての活動も評価
されている。著書に「いのち結んで」「宝
の道七福神めぐり」、「そうゆう人たち」
など。

夢のない所に

実現はない



海からの贈り物・真珠とともに生きる

日本の真珠王

~King of Pearl~ Syunsaku Tasaki Story

田崎俊作物語

第一話

漫画：佐藤晴美

海と真珠を
こよなく愛する男

田崎俊作

(田崎真珠株式会社代表取締役社長)

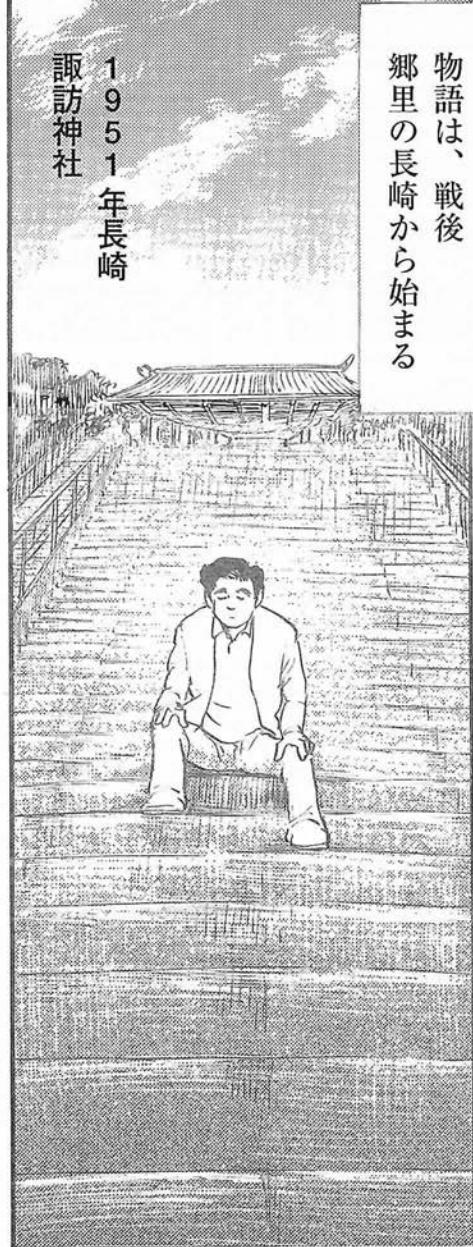


物語は、戦後
郷里の長崎から始まる

1951年長崎
諏訪神社

長崎経専を
卒業したら
どうするかな

田崎俊作
22歳







「夢のない所に

実現はない!!」

「夢のない所に

実現はない!!

「夢があるた
うだ
オレには

それは
日本の美しい
真珠だ

私の生まれた地

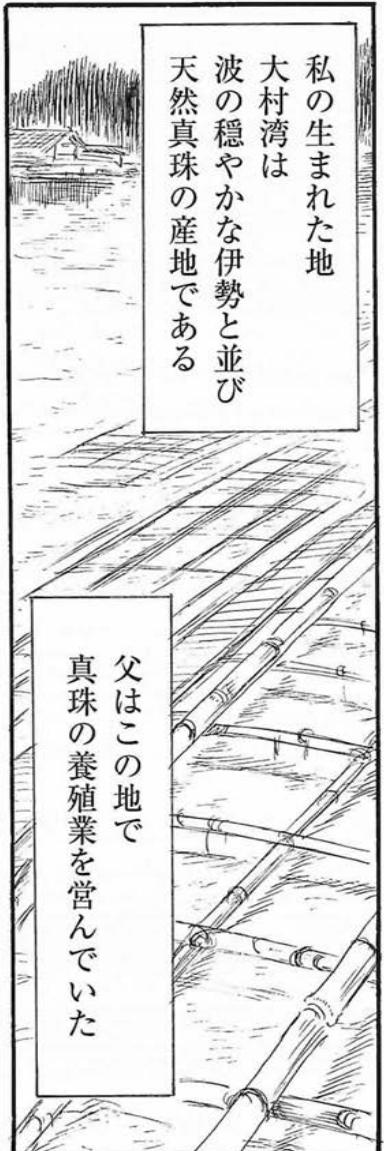
大村湾は

波の穏やかな伊勢と並び
天然真珠の産地である

父はこの地で
真珠の養殖業を営んでいた

私はこの海と真珠が
好きだった

私はこの海でとれる
美しい天然真珠を扱う
真珠商になろうと思つていた





よーしッ
見てろ



オレは
真珠を売つて
あいつらから
金をかせぐんだ

